

---

# 英雄不在の物語

古時計

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

英雄不在の物語

### 【Nコード】

N8847Y

### 【作者名】

古時計

### 【あらすじ】

忘却症と呼ばれる、あらゆるものに忘れられ、やがては世界から消えゆくという正体不明の現象がある。

その忘却症が流行した世界で忘却症に対する耐性を持っていた西野壱伊は、不運なことに忘却症の正体が見えてしまう特殊な体質だった。

そんな彼がある日、似たような境遇の少女と出会ったところから物語は始まる。

やがて彼は、忘却症とそれを利用する者達に立ち向かうことになっ

てゆく。文字道理、想像力を武器にして。

彼が持つのは英雄願望。

とうにこの世界から消失した英雄。

その代わりになろうとしていた。

敵対するはこの世界の真理。

全てを飲み込む忘却症。

果たして彼は大切な人々の記憶を守れるのか？

## 追憶のモノローグ

過去も今も忘れたくない

（１）

「嘘をつくなっ！！」

その言葉を聞くと女は憐れむような目で俺を見た。

「嘘じゃないわ。あなたは、孤児なの。母親なんてそこにはいなかったのよ？」

「黙れっ！！ 嘘をつくんじゃないっ！！ 母さんは、母さんはさっきまでここにいたじゃないかっ！！」

そう言っ て母さんが先程までいた場所を指差す。

「……あなたは、何を言っているの？」

喚く俺と母さんがいたはずの場所を交互に見て、女は信じられないような顔をした。

「母さんは確かにここにいたんだっ！！ それは、あんただって知ってることじゃないかっ！！」

そう、あんただって母さんのことを知ってるはずじゃないか。  
なのに、  
なのにどうして、そんな目で俺を見る!?

「壹伊君っ!」

女が俺の名前を叫んで、頬を平手でぶつ。

「なっ……」

「いい加減にしなさいっ!! あなたの母親なんて、はじめからここにいないかったのよ!」

女は俺を睨みつけながら、そんなことを口にした。

それなら、それならどうして、俺はここにいます?

この家に住んでいる?

そうして、絶望に支配される。

小さい頃の思い出だ。

く2く

俺を引き取るようになった神父、橋本さんは一目見てこう言った。

「そうか、君は覚えているんだね」

他の人が俺に向ける目とは違う、温かい目で。

「他の人が、忘れた記憶を」

そして、橋本さんは話してくれた。

忘却症。

そう呼ばれる、恐ろしい病気の話。

俺の母さんを殺し、皆の中から消し去った。そして、今も世界を蝕んでいるその病気のお話を。

忘却症というのは、その名の通り、忘れさせる病気だ。

正確には忘れられるだけでなく、同時に忘れさせる病気だそう。記憶を、愛を、楽しみを、悲しみを、憎しみを、忘れさせる。人から、いや、

人だけではない。全てから。

橋本さんの話では、ほぼ全ての人間が忘却症に感染しているらしい。

ただ、極稀に忘却症にある程度の免疫を持つ俺みたいな人間もいるのだという。

彼はそんな人々と共に忘却症と戦っているそうなのだ。

原因不明の病、忘却症と。

人々の大切な記憶や思いを守る為に。

この日から、橋本さんは俺の父親のような存在になった。  
人の為に戦う彼は、俺にとっての英雄だった。

く3く

だけど、どんな事にも終わりは訪れる。

「何でっ！？ 何でなんだよっ！？」

その日、俺は寝台の前で跪いていた。

何度も地面に叩きつけた拳が赤く腫れている。

そんなことお構いなしに、俺はさらに拳を振り下ろした。

「免疫がある俺達は忘却症には感染しないんじゃないのかよっ

！！」

「壱伊」

一人荒れている俺に、寝台の上で寝たきりになっている橋本さんが語りかける。

。

「忘却症は、始めはただ忘れられるようになる病気だったと言われている。それ

が今では、忘れられると同時に忘れさせる病気だ。私達が日々成長していった

ように、忘却症も日々成長している。進化していったんだ」

橋本さんの言葉に俺は目を大きく開いた。

「そ、んな。そんなことってあるかよっ!？」

俺が歯を食いしばり、再び地面に拳を叩きつける。  
納得がいかない。

どうして、こう俺の大切な人ばかりが消えなきやいけないんだ。

「落ち着きなさい、壱伊。人は誰しもやがては死に至る」

「それでもっ!？ いや、だからこそっ!! 駄目なんじゃないですかつ!! あなた

が生きていたことを皆が忘れてしまっつ!!」

俯き、涙を流す俺に橋本さんが優しく微笑みかけた。

「お前が覚えておいてくれるじゃないか」

その言葉に俺は顔を上げる。

「誰もが私を忘れたとしても、きっとお前は私を覚えておいてくれるだろう？」

私はそれで十分だよ」

「そんな……橋本さん。あなたは、俺の憧れでした。俺にとって、あなたは英雄

でした。お願いだから、お願いだから消えないで下さいっ!!」

そう叫ぶ俺に老人はゆっくりと語る。

「壱伊、君は感受性豊かで優しい子だ。だけど、少し弱いところがあるね。……

強くなりなさい。優しく強く生きなさい。君は私を英雄と言ったね。



でも、私よ  
りも君の方がよっぽど英雄に近い。君ならなれるさ、本物の英雄に。  
いつか、…  
…きつと」

それが橋本さんの最期の言葉だった。  
俺の目の前で、橋本さんは消失した。  
昔の母さんと同じように。

橋本さんが消え去った寝台の上には、彼の着ていた寝巻きと、  
確かにそこに人  
がいた温もりだけが残っていた。

こうして英雄は消失した。  
歴史に名を残すことなどなく。  
人々の記憶からさえ消されて。

そして、俺はまた親を亡くした。

く  
4  
く

俺は数人のガラの悪い少年達に囲まれていた。

知った連中が大半だ。  
昔、神父の橋本さんが面倒を見ていた連中。  
だけど、きつと何も覚えていない。

そいつらの内の一人が口を開いた。

「お前だろ？ このぼつろい教会に住んでるイカレてるガキつてのはよ」

「……だったら、何だっというんだよ？」

吐き捨てるように返事を返す。

橋本さんに関わる記憶を全て忘れているせいか、一、二ど面識があるはずの俺のことまで覚えていないようだ。

「なんかお前とその教会見るとム力つくんだよ。お前さ、消えろよ」

その言葉と共に拳が飛んできた。

殴り飛ばされて、俺は汚い地面に転がる。

続いて蹴りが上から降り注ぐ。

橋本さんに関する記憶は忘れてしまったのに、あの人への負の感情だけが残っているのか。

だけど、俺は手は出さない。

見えているからだ。

この少年達が近い内に消えるのが。

俺には見えている。

忘却症という病に、彼らが蝕まれているのが。

半透明になった彼らの姿が。

きつと、彼らは色んな人から忘れられて、心の傷口を舐め合い、自分を守る為に集まっている。

だけど、もう彼らは助からない。

「ボロい教会だな、俺達が綺麗に彩ってやるよ!!」

蹴りをくわえていた一人がスプレー缶を取り出して、教会の壁に向けた。

派手な色が教会の壁を汚していく。

自分の体が熱くなっていくのが分かった。

「やめろっ!!」

まとわりついてくる奴らの手を振り払い、スプレー缶を持つ男へと走る。

させない。

あの人がいた場所を汚すような真似は、絶対させない。

「あ？」

振り向いたスプレー缶の男を殴りつける。

「痛えな、ふざけんじゃねえぞっ!!」

殴った男に首を掴まれ、俺は地面へと投げつけられた。  
他の奴らもやってきて、やがて世界が真っ白になった。

「ねえ、大丈夫？」

その声で目を覚ました。

目の前には一人の少女がいて、倒れている俺に手を伸ばしていた。  
た。

だが、そんなことよりも俺の注意は教会へと向かっていた。

落書きされている。

心ない言葉や、汚い絵で、大切な教会が、あの人がいた場所が  
汚されている。

「クソッ」

差し出された手を無視して起き上がり、足を引きずって教会へと向かう。

そして、デッキブラシと水の入ったバケツを取り出してきて落書きを消し始める。

スプレーの汚れはなかなかとれない。

いつの間にか先程の少女がデッキブラシを持って横にいた。

どうやら手伝ってくれるらしい。

「誰かが、この場所にいたのよね？ あなたにとって大切な誰かが？」

壁を擦りながらそう言った少女に、壱伊は壁を磨く手を止めずに同意する。

「ああ」

「そう。あなたは覚えていることができるのね」

その言葉に手が止まった。

「あんた……一体？」

思わず俺は少女の方を向く。

少女はセミロングの落ち着いた茶髪に温かい茶色の瞳が優しそうな印象を与える、かなり整った顔立ちをしていた。

その少女が口を開く。

「ねえ、私達の所に来ない？ きつと世界が変わるわよ」

ここから、全ては始まった。

## 追憶のモノローグ（後書き）

感想、評価、誤字脱字報告等して頂けると嬉しいです。

手がかり

「嫌っ！！」

大きな拒絶の声が部屋に響く。

「認めないっ！！ 認めない、認めない、絶対認めないっ！！」

更なる拒絶の言葉が辺りに響く。

そして、それらの言葉を発していたまだ幼い少女が叫んだ。

「夕食のメニューにトマトが入るなんて絶対認めないっ！！」

「駄目である。理由は、彩りを考えた結果、赤色は外せないからである。それに

、好き嫌いはいけないのである」

「なら、唐辛子でもいれればいいでしょっ！！」

「我は辛い食べ物が苦手なのである」

「あんただって好き嫌いしてんじゃないっ！！」

そんな会話を聞き流しながら、西野<sup>にしもの</sup> 壱伊<sup>いちい</sup>は「私達の所に  
来ない？ きつと世界が変わるわよ」という言葉に惹かれてついて  
来たことを若

干後悔していた。

彼の目の前では今、小さな子供達が走り回ったりしている。

確かにここに来て壱伊の世界は変わった。

彼にとつて、ここまで騒がしく、明るい空間は久しぶり、いや、  
初めてかもし

れない。

何でも今は、壱伊の歓迎会の準備をしてくれているようなのだが、壱伊はそのようなことの為にここに来たのではない。

忘却症に関する情報を得られると思ってここに来たのだ。

少女が壱伊を彼が住んでいた教会よりはるかに大きい教会に連れてきた時、彼は期待を抱いていた。

忘却症に詳しくそうな神父や学者がたくさんいるのではないかと思つて。そうす

れば、彼の憎んでいる忘却の真実に近づけるのではないかと思つていたのだ。

だが、実際はまだ小さな子供ばかりがここにはいた。

「ねえ、とりあえず座つたら？」

ふと背後から声をかけられて振り向くと先程の壱伊をここまで連れてきた少女が立っていた。

「なあ、忘却症のこと……」

「教えてあげるわよ。でも、そんなに焦らなくていいんじゃない？」

少女が微笑む。

「でも、俺は遅くならないうちに教会に帰らないと」

「誰も待つていないあの教会に？」



「それでも、俺はあの場所を守らないといけない」

壱伊の主張に少女は頷く。

「そうね、過去を大切にするのは私達にしかできないことだからそれ  
れも

必要なことかもしれない。でもね？」

少女は続ける。

「私達には今を生きることも大切なことなのよ。ずっと過去（あの  
場所）に縛ら  
れるつもり？」

「それは……」

答えあぐねた壱伊に少女は取ってきていた救急箱を見せた。

「それに、まずはその怪我の治療をしないとね」

壱伊は今の自分の体の状態と少女の持っている救急箱を交互に  
見て、困ったよ  
うに笑った。

「よろしく頼むよ」

「任せなさい」

壱伊を近くのソファに座らせ、救急箱を開けながら少女は先程  
の話を続ける。  
る。

「過去をどうするかはともかくあなたは私達と一緒にいるべきだと思っわ」

「何でそう思うんだ？」

「同じ境遇の人間だからよ。ここ、小さい子が多いでしょ？」

「ああ、それは俺も思って、痛いっ！！ もうちよっと優しくしてくれよ」

突然跳ね上がった壱伊に驚いてから少女は壱伊を再びソファに座らせる。

「痛いのは当たり前でしょ。で、小さな子が多い理由だけど、あの子達はみんな親や兄弟や親戚を忘却症で失った子なの。多くは記憶を失わない子よ」

「そうなのか」

その話を聞いて壱伊は思う。

幼い頃の自分と同じだと。

だからこそ壱伊は彼らの心に抱える痛みが分かった。

でも、だからといってそれは壱伊が少女達と一緒にいる理由にはならない。

「小さい子がたくさんいたら色々大変なのよね。子供に対して大人の数少ないし」

そう言って少女は壱伊を見つめる。

壱伊はだいたい彼女のいいことが分かってきた。

「なるほど、つまり人手が足りないから住み込みで手伝えってことか」

「うーん、言い方悪いけど。まあ、そんなとこね」

壱伊の言葉に少女は眉をひそめながらも同意する。

そんな彼女を見ながら壱伊は苦笑した。

「考えさせてくれ」

「もちろんいいわよ」

と、話が一段落ついたところでさっきまでトマトで叫んでいた金髪が特徴的な

若い少女が壱伊と話していた少女のもとに走ってきて。

彼女の胸にダイブした。

「こはるーっ！！ ヒゲモジャがわたしをいじめるよー」

「小春、我はアリシアを虐めてなどないのである。信じて欲しいのである」

彼女を追って走ってきたコックの恰好をしたヒゲモジャでがたいのいい男が弁

明する。

先程、トマトをサラダに盛りつけていた男だ。

「アリシア、ヒゲモジャさんをあまり困らせちゃ駄目よ」

小春と呼ばれた少女は彼女がアリシアと呼んだ少女の頭を撫でながら言った。

「そうであるっ！！ 小春からもっと厳しく言ってやるのであるっ

「！！　それと小春

、我はヒゲモジャじゃなくて白峰である」

「むゝっ、わたしは悪くないもんっ。ヒゲモジャが悪いんだもん」

頬を膨らまして拗ねるアリシアは壱伊を見て目を丸くする。

「あれゝ、知らない人がいるよ」

そんなアリシアに白峰は両手を腰にあてため息をついた。

「まったく、アリシアは小春の話を聞いていなかったのであるか？  
新人さんが

加わるから歓迎会をやるうって話だったのである」

「むゝ。またヒゲモジャが威張ってるゝ」

「えっへんである」

そんな二人のやりとりを見ながら小春が彼等の紹介をする。

「紹介するね。こっちの子が今年八歳になるアリシア」

「ハーフなのか？」

「そうね、ハーフの子よ」

「アリシアっていうの。よろしくゝ、あれ？　おにーさんの名前は？」

アリシアに名前を尋ねられて、壱伊はそう言えばここに来てから誰にも名乗っ

てなかったことを思い出す。

「あー、西野　壱伊って言うんだ。よろしく」

「ここでのことはわたしに聞けば、全部大丈夫なんだよ」

自信満々に胸を張ってそう言うアリシアにき伊は微笑んだ。

「頼もしいね。困った時は君に聞くよ」

「で、こっちの人がシェフをやってくれているヒゲモジャさん」  
「ヒゲモジャじゃなくて白峰なのであるっ!!」

白峰が訂正した。

「よろしくお願いします、ヒゲモジャさん」

「だーから、ヒゲモジャじゃなくて白峰なのであるっ!!」

紹介が終わって満足気になっている少女にき伊は尋ねる。

「で、君の名前は？」

「あ」

少女は口を開けたまま固まる。

「まだ名乗ってなかったのであるかっ!？」

白峰が驚いた。

「えーっと、私は桜田 小春よ。よろしく」

苦笑いを浮かべる小春に白峰が呟いた。

「小春は肝心なところがぬけているのである」



## 手がかり（後書き）

感想、評価誤字報告等して頂けると嬉しいです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8847y/>

---

英雄不在の物語

2011年11月26日20時58分発行